

平和への願いを 次世代に受け継ぐために

平和の尊さについて考えてみませんか

☎ 秘書広報課 ☎ (93) 1112

富里市は昭和 59 年 9 月に、核兵器の廃絶と世界の恒久的な平和を祈念して「非核平和都市」を宣言しました。

昭和 20 年から 74 年が経った今、国民の大半が戦争を知らない世代となり、戦争の記憶が風化しつつあります。

人の心に悲しみと苦しみを与えた戦争の愚かさ、そして、平和に暮らしている今の生活がどんなに大切なものか、この機会に考えてみませんか。

原爆写真展

各会場で異なる写真を展示します。

展示期間・時間

8 月 16 日（金）まで

各施設の開館日・開館時間内

場所

●市役所本庁舎ロビー

●市立図書館

●北部コミュニティセンター



平和を願い黙とうを

今、改めて問う、かけがえのない 1 分間です。

先の大戦で亡くなった多くの方々を追悼し、また平和を祈念するため、

8 月 15 日（木）に日本武道館にて、戦没者追悼式が行われます。

平和学習リーダー派遣

中学生 4 人が長崎へ

市では、市内の児童生徒の代表を「平和学習リーダー」として、被爆地である長崎市に派遣しています。今年は市内中学 1 年生の 4 人が平和学習リーダーに任命されました。

平和学習リーダーは、平和祈念式典への参列や長崎市が主催する平和学習に参加し、学んだことや感じたことを学校や家庭、地域など様々な場面で伝える役割を担います。一般市民向けの報告会の開催は、日程が決まり次第お知らせします。



令和元年度平和学習リーダー

●富里中 石本 愛理
佐藤 愛

●富里北中 岩田 夕那
稲村 香南

<敬称略>

◀ 7 月 6 日に平和学習リーダー任命式を行いました。

第 8 回平和を考える作文コンクール

市では、次世代を担う子どもたちに平和の大切さを考えてもらうために、「平和を考える作文コンクール」を開催しています。第 8 回の昨年度は、市内小学 6 年生～中学 3 年生を対象に作品を募集しました。応募のあった 78 作品の中から、市長賞を受賞した稲村香南さん、教育長賞を受賞した竹本伊吹さんの作品を掲載します。

市長賞受賞作品 平和な世界を守るために

日吉台小学校 6 年 稲村香南さん（受賞時の学年）

私は、前から戦争の事に興味を持っていました。なので、記念館や、本を読んだりして、戦争の事について調べました。

戦争という出来事があった事を母から聞いた時、とても驚きました。同じ場所に、地球に暮らしている人間同士なのに、「どうしてだろう」という気持ちが一番大きかったです。突然、戦争に協力しなさい、なんて手紙が来たら、私は絶対に兵士なんかになりたくないと思います。でも、国には逆らえないのです。「いやだ、戦場になんて行きたくない。」といくら思っても、行くしかない。そうしなければ、つかまって、拷問を受けてしまいます。自分がいやだと思っても、国の言う事が絶対、という時代だったのです。

記念館に行った時、私は兵士さん達の気持ちが知りたいという疑問を持って行きました。兵士さん達は、戦争に行く事をどう思っていたかを一番知りたかったからです。兵士さん達が、家族にあてた手紙を読める部屋があり、私は急いで読みました。すると、家族に会いたいとか、弱音を吐いたりなど、まったくそんな事は書かれていなかったのです。どうやら、検閲といって、手紙に弱音を書いてないか、国に逆らうような事を書いてないかを調べられたらしいのです。戦争がいやだと思っても、家族に気持ちをさらけ出す事さえできず、手紙の内容までも自由に書く事が許されないのです。さらに、町中に「日本人なら贅沢はできないはずだ。」という看板が出され、子供達までもが武器を作る工場で働かされ、戦争に協力させられました。中高生は、勉強をあきらめてまで、兵士にさせられました。

私の祖父に聞いた話では、曾祖父も戦争に行かされ、戦死してしまったそうです。祖父は、それ以上の事を話そうとはしませんでした。きっと、とても辛くて、話したくもないんだろうと思います。それだけ、酷い出来事だったのでしょ。そして、私がさらに驚いた事があります。それは、殺されていった動物たちや、命を捧げた特攻隊員の事です。犬や猫、馬等を飼っている人は、その動物を国に引き渡し、軍犬、軍馬にされたり、兵士たちのコートをを作るために毛皮にされたりしたのです。戦争に連れて行かれた動物達は、帰って来ませんでした。毛皮にされた動物も、殺されてしまいました。何の罪もない動物までもが、戦争にまきこまれたのです。そして、特攻隊とは、飛行機や魚雷に爆弾を積んで、敵の軍艦に体当たりをするという、自分の命と引き換えにした攻撃方法です。命と引き換えにして攻撃したというのに、ほとんどが敵に撃ち落とされ、目的を果たす事ができず、亡くなって行ったのです。みんな、今の大学生くらいの年齢で、夢も未来もたくさんあったはずなのに。

私は、戦争の事を詳しく調べましたが、戦争をしてよかった事など、一つも無いと思います。たくさんの、罪のない命が消えて行った戦争から、目をそむけてはいけません。

平和な世界を守るため、あんな事は二度と起こってははいけません。そのために、あの戦争の辛さ、残酷さを後世に伝えようと、私は心に決めました。

教育長賞受賞作品

平和への願い

富里北中学校 1 年 竹本伊吹さん（受賞時の学年）

僕は「はだしのゲン」というマンガを、時間が経つのをわすれてしまうくらいに没頭して読んだ経験がある。戦中戦後の激動の時代を必死に生き抜こうとする、主人公・中岡元の姿が描かれたマンガだ。それがきっかけで、ぼくだけでなく、家族でも戦争や平和について話をするようになった。

原爆は本当におそろしいと思う。絵と文だけのマンガの中でさえ、むごいなあと感じるくらいなのだから、実際の原爆のすさまじさは、僕の想像をはるかに超えるものだろう。実際に当時のアメリカのトルーマン大統領は、広島と長崎の惨状を見て、次に原爆を投下するのを中止にしたと聞いたことがある。そのような判断をしてしまうくらい、誰が見てもむごい状況だったのだろう。

被爆した人々は、着物の袖のように腕の皮膚を垂らし、熱い熱いとうめきながら川に飛び込んで死んでいった。そして、その川は向こう岸に簡単に渡ってしまえるくらい死体でごろごろ浮いていた。その後、放射能をたっぷり含んだ有害な黒い雨に当たり、白血病になり苦しんで死んでいった人もいた。草も木も、頑丈な建物までも消滅させ、人間の何気ない日常までも消してしまった。まさにこの世の地獄絵図だ。

ある新聞記事で読んだことがある。平和について活動をしていた、ある団体のメンバーの多くが高齢になり、新しい若い世代のメンバーを募集したところ、ほとんど希望者がいなかったそうだ。戦後からずっと続いていた団体の存続をあきらめざるを得ない状況になっているという。その記事の最後に、こう書かれていた。「戦没者の犠牲の上に、今日の日本の平和があることを伝えるには、後継者をつくるのが焦眉の急」。僕は、はっとした。世界では、どこかの国で戦争や紛争が絶えないのに、日本では当然のように起こっていない。それは、原爆で死んでいった人達や、原爆症で苦しんでいる人達、そんな原爆のおそろしさを実際に体験した多くの人のかけがえのない想いの上に、今の僕の平和があるんだと感じたからだ。

今現在、広島と長崎には、大きな原爆資料館があるし、インターネットで検索すれば、たくさんの原爆についての資料を目にすることができる。それらは戦争を知らない僕達に、先輩達が残してくれた貴重なメッセージだ。目をそむけることなく、一人一人がそれらを受け止めて考えていくべきだと思う。僕は、この「平和」を一生懸命、大切にしていきたいと思っている。